

語原に關する管見」に於て、座の起源は古きにせよ、座なる名稱は左迄古きも思はれず、商工業の座の名稱の如きも今日までは鎌倉時代の末期に現はれたるを初見とすれども、しかも其事實は此頃に始りしに非ず、座は民間の稱呼なれば如何なる場合に座の語を用ひしやを知る事は當面の困難なり、されば普通の座席の意味以外に用ひられし例を擧げんに建武年間記に載せたる二條河原の落書「一座ソロハヌエ連歌」の座も、奥州後三年記の剛臆の座も法然の信ノ座、行ノ座も悉く「組」と言ふ意味に外ならず、春日神社文書正應五年十一月の興福寺木工兼社工の解狀に見ゆる座の記事も興福寺大乘院組の木工東大寺組の木工と言ふに異ならずして要するに二以上同一の事業に従ふ者の組合と言ふ意なり、されば組の意味に於ける座は必ずしも社寺に關係あるものに限れるに非ず假令ひ社寺に關係ありとするも敢て神聖なる座席を意味するものに非ずと言へり。(中村)

## 彙報

### ●京都帝國大學卒業證書授與式及

#### 史學科卒業生

京都帝國大學に於ては去七月十二日卒業證書授與式を舉行し各科

### ●モリソン文庫購入

支那政府の政治顧問モリソン氏の藏書全部數萬卷は今回、男爵岩崎小彌太氏三十五萬圓を以て買受くることとなり、石田文學士の手によりて書籍目錄の調査を終り、八月三十日其受渡しをなしたりと云ふ。モリソン文庫は多年の蒐集に係り政治、經濟、法律、産業、歴史地理、動植物に至るまで支那に關係あるものを悉く網羅しありと云ふ。

### ●讀史會

例會 六月廿五日午後六時より學生集會場に於て卒業生の豫談を兼ねて開く、來會者三浦、喜田阿博士、西田講師、清原、魚造、中村三學士、神浦、松野、下川、辰馬、牧、富森、古田、桑原、鈴木、梅原の諸君なり、席上左の講演ありて十時半散會す。

榮華物語は紫式部の作にあらずやとの歌に就て

神浦萬十郎君

榮華物語はその文章及び結構等確に平安朝末の文豪の作なるべく殊にその中に紫式部の日記を著しく引用し且つ源氏物語中の事を引用せる点より、この物語を以て紫式部と假想するもあながちに空論に非る可し、然れどもこの物語と紫式部日記とを微細に對照する時は兩者の間に一見同様なるが如くにして而も事實の相違する所、或は一事實に對する時間的差異等ありてこの二書の決して同一人の手になりしものに非ざるを知る、且つ源氏物語或は紫式部日記の文と榮華物語の文とを對照するも亦明かに別人の手に成れるを想ふ云々。

吉崎を去る迄の蓮如の略傳

松野 遵崇君

蓮如は應永廿二年に木願寺七代存加の第一子として生れ六歳に至りて賀母に離れ、それより繼母の手に育てられ冷遇と貧困によりて辛苦の中に生立ちたり。當時は山門よりの壓迫甚しかりしため木願寺は極度の微衰を來せし時なりしに彼出でて一代の間に其寺を隆盛ならしめしなり。最初弘教の謀に與かりし者は近江金ケ森の道西なり。斯くて所謂無礙流なるものを唱へて次第に信徒を作りしに、山門の憤る所となりて寛正六年大谷は破却の難に遇ひ、蓮如は其れより江洲所々に流浪して文明元年漸く三井の近松

寺の傍に落付きたり。文明三年近松を立出でて北國に赴き越前吉崎に一坊を構へて盛んに北地に信徒を作れり。當時越前は朝倉と甲斐との戦争ありて頗る亂れ、又専修寺門徒と木願寺門徒との争論ありて加賀の主富樫政親は専修寺門徒を援け、何そなく不穩の形勢ありしを以て吉崎に於ては萬一の際の防備として要害を構へ蓮如は門徒等をして必要の場合には佛法のため一命を捨て、合戦すべき事を許せり。斯くて兩門徒は終に戰端を開くに至り、蓮如は文明七年を以て吉崎を去るの已むを得ざるに至れり云々。

折紙に就て

中村 學士

用紙を横二つに折りて使用する折紙の起源を考ふるに二様あるべし。其第一は平安朝末期に既に存在したりしものにして(兵範記保元二年八月九日、同廿四日)交名、注進、次第、目錄、勘文等(東鑑元暦元年九月十九日、明月記正治二年八月十五日)に用ひられたり、蓋し堅紙を使用する事よりも便宜にして且用紙を節約し得るがためならん、其第二は室町時代以來多く現はるものにして公私各種の文書を折紙に認めしものなり。其近畿附近のもの、中、最も古きは、多州院文書、貞治二年六月五日箕浦右衛門尉定治の土地寄進狀、主殿察書藏文書、康應二年二月四日佐々木氏(歛)遵行狀等にして、主として南北朝以後のものなりしが、黑板博士の注意によりて九州地方には特別に發達し、繪倉時代以來

各種の文書使用せられたりしを知る。即、中野家古文書には永仁五年十月廿八日緯經下知狀、乾元二年後四月十七日少貳學惠運行狀、正中二年七月十八日少貳惠雲下知狀の如きあり、西高辻文書には寶徳二年卯月三日の文書に下文の形式を採れるものあり。其何故に鎮西地方にかゝる特殊の發達ありしやは明かならざれども兵馬倥傯に際し、生活に餘裕の少かりし事は其一因たらざるべし。思ふに古文書の形式、用紙、用語等の上に現はるゝ地方的色彩を研究する事も亦古文書學上看過すべからざるべし。

餘江川發見の刳船に就て

梅原 末治君

去る六月七日、攝津東成郡餘江町字今福なる餘江川の堰堤取崩し工事の際發見せる刳船に就て先日、小川教授、濱田助教に從ひて調査なしたり。發掘の位置は堤の南方に扁して表面下約二十尺の所に横はり、その下に接して木之葉の層あり。構造は大なる樟の木を刳りたる二大部を接合して、所々長七寸余の鐵釘を用ゐて作りたるもの、總長四十四尺四寸、幅最も廣き部分にて六尺を越ゆ、非常に珍らしき遺物なり。此の製作の年代に就ては他に比較する材料殆んどなきを以て明ならざるも、種々の点より考へ仁徳應神時代に上り能はざるも奈良朝を下るものには非ざらん。或人が同じ層より慶長の五輪塔出でたれば新しきものなりと云ふも此の塔は地葺下約四十尺内外の所より出で位置も異なれば採るに

足らず。また刳船側面の彩色ありと云ふ説も、小川博士の鑑定に依れば土中の燐化鐵の爲周圍にかゝる色を生じたるなりとのことなり云々。

北野神社記録に就て

三浦 博士

尙船の實圖、寫眞等を示して説明せり。

北野神社には寶徳元年より江戸時代までの日記あり。こは未だ一般に利用せられざる史料なり。余はその中にて寶徳頃より慶長頃までを見たりしが、この時代は一般の史料の缺乏せる時代なればこれだけのものにては種々の意味に於て貴重なる資料を供す。

これによりて當時の北野神社と、山門との關係、祭神等を知るを得べく、又幕府を始め、下つては豊臣民の崇敬深かりしことを知る。神禰のことは悉くは載せられざれども、問題に上りしものは諸國に亘りて記載せられて神社の經濟事情を徴すべし。西京の町人は北野の社人にして、幕府の保護を受けたり。又余は以前より座の起源に就きて從來の研究を以て満足せずして、組合と云ふ意を有せしものならんと考へ居たりしが、この考を確むべき材料をもこの記録の中を得たり。史料となるべきことに就て述べれば、當時の亂世は全く後鳥羽院の崇によりてなりとの迷信ありしこと北野の神が文學の神として文學者の崇敬せしこと、特に足利義熙の信仰篤く、同人の最期に就て興味ある記事等あり、又祭神の關

係より古來特にこの神社にて誓を立つること一般に行はれ、從つて熊野の牛玉の如く北野の牛玉ありて、用紙も略相同じ云々。

### ●京都府の史蹟調査事業

京都府に於ては、さきに木内知事の發議により史蹟勝地調査會を起し、管内の舊蹟勝地の調査及び保存を計劃し、京都帝國大學内田、三浦、内藤の三博士、東京大學の黒坂博士、久保田京都帝室博物館長、其他碓井小三郎、田中勘兵衛氏等を評議員とし、和田理重官を幹事長とし、西田、神浦二文學士、梅原末治氏調査委員として其事に當り、先づ葛野郡より開始して其各村の社寺陵墓古墳廢墟等廣く歴史的遺蹟につき細密なる調査をなしつつ、ありしが、已に其中、太秦村、小野鄉村、中川村等の調査を終了したり

### ●京都史蹟會夏期講演會

子爵清岡長吉氏を會長とせる京都史蹟會は去八月廿一日より四日間北野神社妙覺寺、妙影寺及、寶塔寺に於て第三回夏期講演會を開演し、史蹟の踏査をなし、第三日に堀川社中によりて備馬樂(伊勢ノ海及朗詠(池冷シ)を演奏したりしが、聴聽者約百五十名、各種社會階級の人を網羅したり、講師 演題等左の如し。

徳川時代に於ける京都經濟學說  
室町時代の日蓮宗

瀧本 誠一氏  
三浦 周行氏

平安朝時代に於ける貴族の家庭教育  
平安朝に於ける諸物に就て

史蹟上より見たる京燒  
京都に於ける本草學者の事蹟

中村 直勝氏  
林 森太郎氏  
碓井小三郎氏  
新村 出氏

### ●水上郡志編纂概況

兵庫縣氷上郡丹波史談會に於ては大正四年十一月大典記念として郡志編纂の議を決し、郡の補助を得て、翌年早々永田尙興氏を編纂主任とし、史談會理事長近藤九一郎氏を初め同會理事の諸氏編纂委員として着々事業の進捗を計りしが、半途にして主任永田氏病に罹りしより、九月より座田達二氏を主任として事業を繼續せしが、同時に從來の方針を一變し、三浦博士を顧問に囑託し、柏原町以下各町村の古老識者を史談會委員の名稱の下に事業の援助を乞ふ事となせり。編纂の主なる目的は郡内の地誌及び古來の民政沿革を記述し以て施政の參考に資せんとする者なるが、其事業を第一、明治維新以前の郡内史料の蒐集並に踏査、第二、東京史料編纂掛其他に於ける史料の蒐集、第三執筆の順序を以て進行せしむることとし、昨年十月より約六ヶ月を費して郡内の史料蒐集及實地踏査の結果、郡内の史料は維新の際多く散佚して、鎌倉時代末期以前のは殆ど存することなく、それ以後と雖も餘り多

くを望むべからざるの有様なりしが、實地踏査に於ては、一斑を郡内地勢上交通路の關係よりして東部、西部、西北部、東南部と夫れ夫れ人情風俗等に於て差異あり、東部は京都、東南部は大坂西部は播磨、西北部は但馬の影響を受けること多く、之等の影響は中央部の平野に於て融合せるものあるを知れり、古墳は、郡内一二ヶ村をを除く外殆んど至る處に散在せるが、中にも沼貫村の内油利の百塚及び佐野、小川村の内岩屋及び野坂、生郷村の内北野等の群集古墳並に幸世村の内氷上の山上古墳は注目し價すべき者なり、然れども其の規模小にして形狀に於ても圓墳其の大多數を占む、其の他吉見村の方形墳と見るべき者、及び和田村の内金屋の十三塚等も注意すべきものなり、發掘物の多くは已に散逸したるも國領村に於て發掘せし石劍、由良川の支流竹田川の沿岸の古墳より發掘せし陶棺の如きは特記すべし、金石文の類はその數亦少く、石彫刻物なども僅かに南北朝時代の者二三を見たるに過ぎず。次に社寺建築物に於ても概ね徳川時代のもの多く、佛像等も優秀なるは少かりき。本年四月上旬よりは更に約一ヶ月間東京に出張し、多數の史料を蒐集せり。史料編纂掛文書等に參考となるべきもの多數ありき。斯くて大体材料の蒐集を終りたれば、彌々七月上旬より起稿に着手し、先づ全編を總説、各説に二分し更に各説を編年的に行政沿革を記述する者と、紀事本末的に事實

を叙する者と、各部落別に説述する者との三に分ちて詳説せんとし、目下總説の執筆に従事しつゝあり。因に徳川時代の當部に領土を有せし各藩邸に就きて藩政時代の史料を蒐集すること、且つ隣接各郡の史料蒐集は時機を見てこれを遂行すべき計劃を取り、維新後明治時代の郡治、町村政に就きては郡衙並に各町村役場に材料の蒐集を委託したれば、最後に於て、これ等を取纏めん計畫なり。(陸田達二氏報)

### ●桑原博士增補「東達支那記」批評の補遺

本誌前號掲載の文學博士桑原鷗藏氏の增補「東達支那記」批評の補遺として同氏より左記の文を寄せられたり、仍て之れを掲ぐ前號に掲げたる拙稿「東達支那記」中に、一四一頁に、吾が輩はヘリオのレーム拂蒜説が、何雜誌に發表されて居るか知らぬと申して置いた所、その後、文學士石濱純太郎君より、右は一九一四年のJournal Asiatique三十四月號、四九八―五〇〇頁に掲載されて居ることを注意された。吾が輩は未だ指示された雜誌を寓目する機會を得ぬが、不取敢、に石濱君の注意に對して、感謝の意を表する。(大正六年九月九日)

# 會 報

(右紹介者 玉泉 大梁)  
 東京市本郷區西片町十ノ九號  
 (右紹介者 岩橋小彌太) 齋藤 隆 三

## ●寄贈交換書目

釋迦牟尼傳 常盤 大定氏

運材圖會 住 廣造氏

飛彈國中案内 本庄榮次郎氏

熊野諸手船(英文) 西村真次氏

國史叢書 國史研究會

考古學雜誌 十、十一 考古學會

史學雜誌 七、八 史學會

歷史地理 七、八、九 日本歷史地理學會

東洋哲學 七、八 東洋大學

飛彈史壇 四、五 飛彈史談會

佛書研究 三三、 佛書研究會

國學院雜誌 七、八 國學院大學

## ●入 會

岩手縣盛岡市縣立岩手師範學校内 菅野義之助

(右紹介者 原勝 郎)

愛媛縣立松山商業學校 羽田 又永

## ●會費領收報告(振替貯金拂込のものに限る)

(大正六年九月三日迄に受領の分)

一金壹圓貳拾錢(大正六年分)

大西 源一 友納 養德 三幣 竹藏

飯島 喜廣 武田 祐吉 山田 貞芳

島山 喜一 平泉 澄 池内 宏

渡邊 轍 石濱純太郎 山本愿太郎

岩田 覺藏 今村 孝三 木野戸勝隆

井上 琢磨 清水 福市 藤井準一郎

谷森 饒男 小松 倍一 森口奈良吉

大野繼之進 津田左右百 香取 秀貞

一金壹圓五拾錢(大正六年分)

木下 寂善